

り物せし折のことなど思ひつらねて、四方をのそめと、やみの夜なれは、いつこもいつこもあやなくて、見なれし東山のかたちさへ見え、いと口おし、いなりにいたれと、また夜あくへうもなし。只一軒おきて、茶わかしたる家有ルに立やすらふ、さて藤の杜にてそやうやう暁に成ぬ、桃山のほとりにて与三兵衛もかへしぬ、豊後橋にて夜あけはてたり、川つらそこはかとなきりわたりて、山のはやうやうあらはれ行ほと、いと哀也、きのふの朝ほらけのきぬきぬ思ひ出られて、いと袖のみしほれまさるに、大方の都のなこり、はたいはんかたなし、せめてけき、都の山のすかたをたに見てわかれんと思ひしに、夜の内なれば、かひなく過て、今かくあけぬる空は、はやや遠くへたたりて、つねにけちかかりし東山などは見ゆへくもなし、只あたこの山のみ、なをかはらぬ程に見えたるも、つねにはやや遠くて何共思はず、いなかのやうに思ひてのそみし峰の、今は京の山となかめられて、見かへりのみす。をくらつつみ(小倉堤)をはるはるとわたりて、長池・玉水など過るまで、なをかあたこの山は、京のかたみに見かへされたり

七 安永五年(一七七六)五月六日

二条城番として在京中の篠本廉、萬福寺訪問の帰路伏見城跡より巨椋池を望む

京遊記述／紀行日本漢詩一 富士川英郎・佐野正巳 及古書院
平成三年
遊萬福寺

(中略) 及辞出、日既過午、吾護台禁嚴出入、有時余恐晏乃還、經六

地藏、右折入山、是為城墟、登眺甚奇、宇水下隘巨椋池、渺乎西、池多產蓴菜、古人或拳之、以對羊酪、或思之以棄官、明袁中老則品、以為唯花中之蘭果中之楊梅可異類作配、然其曰東不踰紹西不過錢塘江、以故世無知者、則華人乏於此物之可知矣、本邦州而在焉人而嘗焉、唯是古人所寵、余不敢默也、池幅員甚大、觀亦甚壯、長堤一帶橫截池中、洲渚坻島交乎左右者望之、若連綿糜腫与波上下、丘谷林藪榮迴面勢、凸乎重然凹乎鬱然、凡州南山川於是畢出焉、但茂松遮目為可恨耳、山根桃樹成麓一望極目所謂桃山也、花時壯觀可想、於是心口相誓曰、及時不觀花于此者、有如斯林、東崖先生嘗有金湯桃塢句、先生豐公故壘桃花詩、叱吒時移霸業空、百年葵麥動春風、金湯變作桃花塢、遠近霞蒸千里紅、三復之、以致弔古之意、乃去既至新御香宮、或曰、宮処此尚矣、及豊公城焉而移之狼谷、後以神為崇而復之、然則今所謂旧者乃新而新矣、一日之拳名実長反斯事雖小可以戒大焉

八 天明二年(一七八二)十月六日

上田秋成、奈良からの帰途小倉堤を経て伏見へ向かう。

山叢・上田秋成全集十一 歌文篇二 上田秋成全集編集委員会 中央公論社 一九九四年

井出の里過るほど、雨しきり也、玉水はわか笠のしづくにそなめらるる、長池と久世のあひたを、くせの驚坂也と云、いまは畑にひらけたれと、猶をちこちゆくてにも木立のおほくて、神代のままに、春ははり秋は散かひつつ、古ことの葉のいつはらさりけり、雲のむらむらもやや立わかれて、雨もやめる夕くれに、おほくら(巨椋)の江の堤ゆく、いと目さむる所也、右手は入江の波静にて、宇治のをちかた

また、めもはるはると見わたさるる、ひたりは淀野の沢よ、海原なし
て、とほしろくかきりなきこころす、山崎につつく峰々、雨の余波の
打霞むさへに、夕雲の立なひきて断続の峰をなすと云から歌、思ひよ
せらる、むかふ高嶺よ、あたこの山なるへし、宇治山黒う繁りたるに、
しるき雲のそひきたちて面しろ、伏見の田井をすみかふとか、落る雁
かね、をし鴨のたちいる羽音、入江に響きてすさまじとそきく、芦の
葉かけに、むらきみらか家ともむつかしけなる、水、孤村を抱くとは、
かかるをこそ、あしろ木にいさよふ波のさやめくは、いさり船のこき
てかへる也、かれもこれも、いたつらに見過すへからぬななめ也けり、
ある人のいへるは、もろこしの西湖といふも、たたここの見わたしは
かりなるに、かれは宮ひたる事共を造りそへし物そと、さるは、今ゆ
く中道は、蘇子瞻か造りし堤とも云へし、けにも人に衣冠粉黛もけさ
うあり、勝地に花柳殿台のなかめをそふるには、柳か枝に花さくらを
もさかすへし。さるいろ香をもからてよ、すすろにあはれと思ひしめ
るは、此夕くれの心すさひにこそ

つつみもて家にもかもなおほくらの入江にうかふあまのつりふね
なにはの浦人かおもきくち網にはうちいつへくもあらぬを、ゆくゆく
江によほひし人もしはしなくさむは、この言のはあそひになんあ
る

天明二年冬十月

九 天明三年（一七八三）三月二十四日

高山彦九郎、奈良より小倉を経て京へ向かう。

天明京都日記・高山彦九郎全集2日記篇一 萩原進・千々和美 高

山彦九郎遺稿刊行会 昭和二十七年

二十四日、晴る、長池の宿りを立ちて、寺田・久世・広野新田□□
□□拍子に至る、長池より□□□□長へ六丁斗にして□□□□坤二
里にして八幡宮、大池目下に見ゆ、三里四方斗に見ゆ、小倉の池と
もいふ、一口といへる里も其ノ辺りに有り、小倉の里此辺宇治に近き
故茶を多つく作る、よしつ□を以て覆ひをせり、小倉堤去年の洪水ニ
所江切れたりといへるによりて便船に乗して大池を出ツ、大池沓里四
方と号す、西に人家多つく見へたるに□一口といへり、□□□□り八
幡山・淀の□に見へたり、山崎山、其レより北に見ゆるは吉峯、同愛
宕山、丑の方に比叡山、北に伏見の城跡、其ノ東に続きたるはおぐる
江山、東に当りて醍醐山、其ノ南に続き黄檗山、南に遠く生駒山、
今日は霞みて金剛山は見へず、風景よし、小倉堤南北沓里にして中程
目川とて家六軒有り、堤ハ大池の中にありて東西共に池の切戸へ上る、
舟に乗れる事三十丁斗り、向ク嶋に至る、町家あり、是レも池の内也、
農紋橋（豊後橋の誤りか）は向□□の間に懸る、百四間半とぞ、舟に
て渡る、大池鯉鮒の類イ漁人捕りて京へ売る、またもろこなる小魚を
捕りて鳥の餌にして売る、是レを小倉の生餌といふとぞ、小坂を登り
て右に常磐井石の井筒也、太閤秀吉の遣ハれたるよし、長池より豊後
橋迄三里有り、御香の社を左にして桃山を経て藤ノ森の社南に向ふ

一〇 寛政元年（一七八九）二月二十八日

司馬江漢、奈良より小倉堤を経て伏見にいたる。

江漢西遊日記／『日本庶民生活史料集成』二 三二書房 一九六

九年

廿八日 曇る、(奈良) 椿木町古梅園へ参り、天覽の墨を見る、亦墨の形を見る、妙工なり、夫より南都を出て七里、伏見に至るに、其路小倉堤あり、是は京より南都へ宇路(宇治)を廻りては遠し、堤湖の半にあり、太閤之を築しとぞ、岸々に疎柳を植、柳キ篋を作る、堤長さ三十町、其半に漁村両三軒あり、京町近江屋に至る

一一寛政元年(一七八九)二月三十日

司馬江漢、伏見宇治見台よりの眺望を樂しむ。

江漢西遊日記／「日本庶民生活史料集成」二 三一書房 一九六九年

三十日、雨やむ、曇る、隣家九兵衛と云人、亦佐兵衛と共に、宇治見台と云所へ登る、太閤庭の跡と云、其行路を昔シ大和街道と云、今は左右畑なり、其畑の名あり、鍋島、黒田と呼ぶ、古への屋しきの跡と見ゆ、其畑のウネウネに梅桃を植て、其比梅の花さかりなり、台より見下せば皆梅村、小倉の沼堤、向ふ方は春日山、八幡山、遙は吉野の方金剛山を望む、左は黄檗山、宇治の方なり、台を下れば御香の宮とて、鎮守なり、門は古への台所の門と云ふ、画馬堂に大釜に菊桐の紋あり

一二寛政元年(一七八九)三月一日

司馬江漢、宇治の帰途小倉堤を通る。

江漢西遊日記／「日本庶民生活史料集成」二 三一書房 一九六九年

三月朔日 天氣寒し、宇治の方へ行くに、宮の前を通り、梅畑を過て、

城址を左に見て行くに、六地藏小畑(木幡)村を過、黄檗山に至るに、入口門に第一義と云額、山門に万福寺、本堂に大王殿、裏に威徳莊嚴と在、雪峰沙門即非敬書。誠唐めきたる処なり、夫より三室堂、橋寺、恵心寺、恵心僧都自作の像あり、寛仁元年六月十日卒す、今年迄七百七十三年になる、橋あり損す、舟渡し、即宇治河是也、渡りて松あり、扇の芝と云、左に釣殿、鳳凰堂、前に池あり、其上の瀬を山吹の瀬と云、此時大和廻りをせず、亦小倉堤へ出て、伏見京町に帰る

一三寛政五年(一七九三)五月三日

窪木清淵、伊能忠敬とともに宇治を訪れる。

西遊日記／史料京都見聞記二・紀行2 駒敏郎・村井康彦・森谷 尅久 法蔵館 平成三年

三日黎明、(大坂より) 舟行七十里にして橋本に到る(中略) 山(石清水八幡宮)を下り木津川を超ゆ。即ち澱河納する所の上流なり、其の大橋は此を去ること遠からず、十五里にして宇治に到る、又た是れ郊原の村路なり、大瀦有り、広袤十許里、大池と号す、宇治川の匯りて大沢となるものなり、雨潦盈溢せば往々路を浸す

一四寛政七年(一七九五)三月二十三日

小宮山楓軒(水戸藩士)、京を立ち小倉を経て奈良へ向かう。

寛政七年西遊記／隨筆百花苑3 伝記日記篇3 森銚三・野間光 辰・中村幸彦・朝倉治彦 中央公論社 昭和五五年

廿三日 京師發途、伏見豊後橋ヨリ向島ヲ拜見シ、小倉堤ヲ過、奈良

